

サトウ家のハゼ釣り 宮中雲子

自由時間のない内弟子時代、ハゼ釣りは大変な喜びでした。サトウ先生は家族サービスの一つとして、奥さんや仕事関係の人、弟子など一族を連れ、千葉県浦安の吉野家からハゼ釣りの船を出したのです。

早朝、東京からハイヤーやタクシーを運んで浦安へ。サトウ先生の乗った車にはいつも一升瓶が二本積まれていました。

たいていの人はそれがサトウ先生の飲み分と思っただけでしたが、そうではなく船頭さんへの土産でした。船頭さんはきまってる吉野家の主人・長さんでした。

ある時、すれ違った船にちよつと会釈をしたサトウ先生は私たちに、「山本周五郎さんだよ」と教えてくださったのですが、私はまだ山本周五郎さんがどんな人か知りませんでした。

それは何と「青へか物語」の著者だったのです。私は帰ってすぐ「青へか物語」を買って読みました。ぶらりと浦安を訪ねた周五郎さんは、そこが気に入り、大正十五年から昭和四年ごろにかけて浦安に住んで、浦安を描かれたそうです。その頃、まだ小学三年生だった長さんが土地の情報通の少年として物語の中に登場します。

この少年・長さんがその後、私たちの船長である長さんになったのです。

吉野家を出た船は、両側に葦の繁る川筋をポンポンと蒸気の音を響かせて海へ下ります。葦の間にはシラサギがぼつんとたっついていて船を見送ったりしていました。

一面に海苔しびの立つ東京湾がハゼ釣りの場所、たいてい海苔しびの間にはいつたりその傍らで船を動かしながら、ハゼ釣りを楽しみました。

愛媛の海の傍で育った私は、もちろん魚釣りの経験はありましたが、東京湾のハゼ釣りとなるとやり方は全く違って、ハゼ釣りの

指南役、ごっちゃん世話になりました。ごっちゃんはサトウ先生の古い友人で、東京美術学校出身の絵描きさんでした。ハゼ釣りの餌はゴカイ。ミミズの親戚みたいな虫で、慣れるまでは気持ち悪かったものです。

ハゼは初めての人にも釣りやすく、すぐに何尾か釣れました。釣れなくなると船頭さんは場所を変え、客を飽きさせないように、細かく気を遣っていました。

昼になると、竿をあげるようにと言われ、静かな場所に移動。ここで船頭さんはハゼやエビ、イカなどのてんぷらを作ります。あさりの味噌汁に、漬物くらいの昼食でしたが、揚げたてのてんぷらのおいしさ。海の上でみんなと食べる食事はなんともすばらしく感じたものです。

食事が終わると、船頭さんは片付けに入ります。その間も待ちどおしい人は、勝手に竿を下ろして釣りはじめたりしていました。

船の上で女性にとつて難儀なのがトイレですが、引き潮時には葦の茂みの陸に上げてもらい、用を足しました。満ち潮になると、汚物は海がさらってくれます。私たちはこれを天然の水洗トイレと称して重宝していました。

サトウ先生は「秋の子」という詩の中で「すすきの子 一、二の三人 ハゼ釣りしてる子 三、四の五人」とつたつていて小さい頃からハゼ釣りに興じていらしたようです。サトウ先生が「秋の子」でハゼ釣りをうたっているのは、せつかくハゼ釣りにつれてきてもらっても、同じ材料で私が詩に書くのは気が引けます。

何かいい詩の材料はないものかと、釣りをしながらもあたりを眺めて考えていたものです。秋から冬にかけてハゼは大きくなるそうで、その頃に釣ったハゼは、持ち帰り焼いて保存。お正月の甘露煮になりました。



吉野家の船長さん

サトウ家のハゼ釣り

宮中 雲子



釣りをしている間、サトウ先生はお酒は飲まず、もつぱら釣りに専念していらつしやいました。が、まわりの誰彼に「釣れているかい？」と声をかけておいででした。

帰り、少し回り道をして「舟橋屋」へ寄り、少し餅を買ったのもなつかしい思い出です。今は駅中に出来た店のあちこちで「舟橋屋」のくず餅を買うことが出来ますが、当時はわざわざ出向かなければ求められなかったのです。ですから、私にとつてくず餅は「舟橋屋」と思い込んでいたところがあり、ハゼ釣りとしつかり結びついています。

毎月のように催されていたサトウ家のハゼ釣り大会も、サトウ先生が亡くなった後は途絶え、ハゼの釣り場だったあたりはディスプレイ二ーランドが出来て、大きく様変わりしたようです。

私たちが行っていた頃の浦安は、「青へか物語」に書かれている浦安よりはずつと開けていたのですが、ハゼ釣りの頃が懐かしくなると、「青へか物語」を出してきて読んでいます。数年前、船頭さんの長さんが亡くなられたということを新聞か何かの記事で見知りしました。それにつけても、浦安もハゼ釣りのも何と遠い思い出になったことかと思うのです。

和歌山の女性誌 【ベスタ セソング】

季刊 セソング NO-92 平成24年10月1日発行

発行者 ペングループ・彩 印刷所 (株)和歌山印刷所から資料抜粋